俳諧十論

俳諧十論
全

E 32
151

空華らきあ

俳諧十論 附序

東華坊述

□□□藏書

あるとし武江の芭蕉庵にて茶話禅といふ録を
あらはして吾家のりはとあかして我宗の風雅を
ひねもすむしろ文を論語の述而にならへねは維亡し
の向後くあつめて此十論とするに稿をすてさる為
は例のゆるし給ひて今や世間の俳諧とするに
まその事は本の来るもるをきく人のちりをそめて
例たくるを近つく我は俳諧を言好冬戯よ
さしてつく例のおしへく例のつかしく東子ちまとめの

東京國大學圖書

B 23475

世枝はあそひく人のかへてまへ伝ん事も是ある物の
おこなはれさてといふ事なし我より人へとたまはんとを
かへりて人まよはしてよれなむ恠をたくむは究あれは
口舌の要とおもふより捧りの諂はるゝをなさしき
けなる此論ともね暮三ら評のゆゑしに湘子庵の意得
しるてなしきるやたれた世の要は三十年よりしてせ住
あり矢減あれとや此論もしや私なるらんまなく
三昧の眞実意をかゝあは我れの風雅と思ふ佛よ
へるも例よ俳諧の虚実なるへく例は文章の當
たる評に從ふへく評に修る事し

諷諫

虚實　つまり さまざまの 意あり

字義をとる事りたる語なし

Illogicität

此字上子下き語なあらず

第一俳諧傳

夫れ俳諧の傳といふものはなはたし此史記に滑稽の
名ありて齊楚の比より秦漢の間まてに七八人此
言行をまろし太史公は天道の賛詞より或は笑言
とめて大道にかゝはらすとし或は談笑として諷諫とし
滑稽ちは酒樋（コガ）の喩あるよし姚氏は俳諧のことくそ
畢竟は虚実の自在より言語にあそふのいひなるへし
去れは俳諧のよくくやはらく虚実の誠なるへくもなく
三皇五帝より禹湯文武に傳はりて其名は司馬遷

俳と誹

歴史の一班

ゝ史記に伝へさかりぬとなる一し禅に太極のたとへさら

て儒仏老荘のむかしより虚と実とをもて作くなし

へく実を虚とをもてたとへそれは孔子に荘周ありて

仁義とするとき釈氏に達磨ありて徒論とや申る

いつれも俳諧の機変なりけん俳諧なりし儒仏と

やうけく今もて詩歌の媒とし又一しらいやゆる誹るも

また天の浮橋にけんを御へく伊奘諾伊奘冊の鶺鴒の

喩より天照御神もうけ給ふ弥々虚実の間に

ゐとはなやむしとて猿田彦は姿おかしく天鈿女も

ま捨され一言に風雅の俳優とされしなりんぞより

八雲のむかしに難波津の歌をもてうたとあらはし浅香山

の詞をも虚とあつかふ一万の葉をおしてそ伝はるなり

誹諧の名は古今集にえらばれてそれより和歌の

一躰とはなりぬるを俳諧と誹諧とは音訓の論

ありて八雲御抄にも二名をあきらかに二条冷泉の歌仙

達も此風躰をふかくあいしけれは法式にも新式の

差別の口伝あれは芭蕉翁の書にも人倫の俳諧と

男へし白馬に家訓の一條をあたへられて文明の比

あらん山崎の宗鑑法師も世に誹諧の名あるより

守武望一も是をつかひて百韻と伝へ子句をはらぬ

軽口

貞徳は貞室と宗匠の名ありて専ら誹諧の言語を
伝へられしが貞室よりやゝ世にゆるしの名を誹し
隅田川のうたに吹れても向ハ和哥の深き情にかゝる人は
今の風雅の根さしとやいふべし其のち談林の言ふ因ハ
武城に・檀林の額うちて誹諧の涅不見ハ破りされと
耳に言語のおかしきとゆく眼に姿情のさびしさを
しられハそれもことはりにこそはなしといふとも時ハ
未だ師なしと師なかりしを其の弟子ハあしく実らに
今の世の誹諧といふを今様の人の軽口とおもひて云ふ
ようと連哥まなる人も一座の清興によひ捨て誹諧の

禅
古池蛙の
Intuition
翁古池の句は唯一語として何ゆゑとおもはず

ことやもれる人あれとも誹諧の名と結ひつる師なしおろかや
はいふ俳諧ハこまろえ・唐虞の代よりしられてこゝろ
旅川楚建の後にあらわれ其風ハ和漢の一躰となり
况やそもそも法と称へそれ世情をあつめて教となる
滑稽の人ハ善悪に係りて△書画相の様をはけ
て俳諧の禅と称へ△弥ひよりも法然上人の答に
あひく善悪の法と称へ禅ひしよりも古池の
躰に自己の眼とひらきて風雅の正しさを人にわけらん
実を天よりうけ作よて自悟とも自證ともいふ（なせ
世まつる。誹諧ハいさゝかに俳諧ハよし　芭蕉庵

とえ祖としてしるへし
傳曰此一段ハ俳諧の根ざしを示して儒佛老の三ツ
より子並万ぶの故あれとも帰する所ハ虚実の
二ツにあり今や俳諧の一名をもつて虚実をあつかふ
神道とする嫌の二字ハ十論と作して世法ニ
時宜の二字あることを傳へしある人俳諧と
誹諧の字論を古今集とも數尾及ふて誹諧(ヒカイ)
しるしむかしを此類として私定の作と云へ
やり未だ及ふて俳諧(ハイカイ)と訓を傳へ一代行に向
論を云へることもして白馬の四十二法によりそれ

と夏の口傳とする中はかし此翁ハ伊賀の素性にして
こちらハ桃地の童名ありし若年ニ仕官をねがひき
洛の季吟ニ俳諧とするからか埋木を書きそへて
朱点を加へる抄二冊あり是を傳ふ實文の中比
さらに連ニ哥の新式を増補し傳へられしそれ
頭書ニ朱点をかふ或は百人一首の秘抄あり
或ハ古今の序傳ありけるを見せそれより七人
の弟子あるなどして其のほとしてふるまひたり
後として俳諧をもてはやす斯くて天和の初めなん
武江の深川ニ隠遁して古池や蛙飛こむ水の音

とする連歌の一句に自己の眼をひらきしより俳諧の一をひらけりさるは実に俳諧の列僧と論をへ史記の滑稽よりいひて古今集の名にひらむべきと今は俳諧と誹諧とにそのく新旧の名をもちて一天宗の一えをと建立した況にやもし道の八九をひらし則は和漢の一二をあらそひくるに文章自在の論といふべしさるに中古の俳諧師をおほくそのそれ形にしたより貞室と称せしも句は今の世に讃せてそのくとはかりものなし

いさのそれ漢職の斷といひに記る誹や此二句の深信とおそて今の俳諧の根ざしと学る實は風雅の私なからんやた実に新旧の差なきと信をへし蓋いはむ此頭の去待たるより馬種の才子達と云ふべし

第二　俳諧道

おも俳諧の名といふも第一に虚実の自在より世間の理屈をよくそえるまく風雅の名理によあらぬといふ也誹は俳諧の實語なる一も人にてはあんなくんまい狂言

subjectiv

objectiv

俳諧の儆にするなんに虚実の間にゐんとあたらしくいへる言語の説を宗とするも一しやより虚実をたんやうむかしおこなふ所の言語なるんとも世にいふ俳諧は花鳥の風あるとはかりを貴ぶとおもふ人のいひ也れとも花鳥の為ならや心の天遊とせんとして吾人の仁義を後されは世情の理非とおしかけて虚実のみしやにあそぶむひとてあるらん俳諧を理非とあつかふ今日の世情をあはれむれはなと虚実の事に化におこなふは法と世情の和説にはなく言と一字線のおもむきをよして時宜此一体を云てうやまへられは俳諧のなるといふ儒仏老荘

の間となくいふ虚実に中庸のはあると、いふむかしより儒佛の大みちを虚実の名ねに宗とうけるも俳諧は枝わかれ仲人とするに一山はてゝは五常あり世情の人和を人倫の常になしておかしきを俳諧の名とするはりしさも風雅の遊とするに人ようけ之とする付た弟に千里の四維とかさなりし座一枚のさいを言れをに八体の草香をたくねとも一瓢の飲のたのしとかくきてんに世情の変ともちて笑言に耳をあけてむかし俳諧自在の人とて其一しかるに翁の俳諧を宗鑑とあらひ守武とけるなりと俳諧の詞いひあつかり

然れとも俳諧の心を得たる人なし。けれは五百年は俳諧
に古人なしといふことをひそかに門人にはかやかて家訓
の秘文となしてなかなか世の滑稽を論せん
むかしの俳諧よみてつれつれ今の俳諧にあらぬ
からといひむかしにかへりて代々の撰集にけれは風雅のかね
あつまりたる俳諧の胴の此眞をやもなく俳諧の心
の風雅に得と作入すらやいてや俳諧の詩を杜陵
あり文字に飛ありて物の姿情ととくはすこふ
それら雅言と俗語とまはりて例に虚實の自在あり
例のなかりしく例のあられに風雅そ。はや此遠隆のすあれ

其その外の詩人哥人連歌風景と加へたり言語をかさねても
哥をとらへりねとらへたるのそいつれも上手の名をあらん
名人の場をもらたに遠からんまもらんれんも上手との
傳らひは十なるを十知の者にはさらさき名人は一字の信
あるに信なる万物の名をはまさむるへは天地もくも詩に
變化をふれて鳥とおなき風ともおもふ鬼神もとも哥
に演をこれしてもちまて月にまよふ況や俳諧
の卑賤なる信なき人の虚誕に落さん人や實に
儒佛の内證を得られたる人もこて信にあるてとおくあらん
上にもてまには法をひろむとはよりゐる人の連誌し

唯とあり才子なしあらの冥府あらん儒家に要はなるゝ者は
あるも釈門に仏菩薩の号をもてあそびなどに頓断の
法ありと志るべし。みだりにそれ古詩といひ古言といひ
そのふみをさかしく作りなれしに。代々の文字にかゝはりて
うまれてことばかくしとや。詩歌をいひて今に誠をかくして
也よりてもとのつくるところやむしそる道理のことわりを
わすれむと漢魏の比より詩文にあそびて。渕明をや
風雅の心も実へとかくし一万葉も今の口状にいひしく
ありて草木の梁とありしあらで男女の情を演る
にこそ和かのかくして言語にあらず一字のまさくあるべきと

人麿をまつりしも実に自在の神としてこのたびその父祖
とあふぎて ひとむしろより十知の上にあるべしけれは
長嘯を行下に十哲の名をみなゆる天下にそこ子の徒あれ
ともへにむかへて俳諧をとられさてこそ人の信に実をも
悟る。我が力の功と偏ことて武江の草庵にさならし
仏頂和尚の禅室によりかり払子一旋の室にすゝ語
とありて俳諧のまことを口授あれるより世間の現
とよくなれてよく風雅のたのしみにまよとあるれ奥の細道
よりそのまことをたゞし湖南の幻住庵に山家の名
とかくして杜律の五言を枕として山家集をたつさえ

て貧窮なれば背よりうくる玉帛の礼にも勝とおもひて
淡薄やかたとまもられ衣食の離しんとならし
そらて遠きらは稚葉の糧と作り近きらは古むしの泥と
まいらせてそらのあれとおのれとしゆするしたるて
生涯の計にも似て移文のうきえも立へられ例の（さびし）
く例の不りしく俳諧らんのあるひちるとするむしへ
そりもやけるもの功を論ずるに儒仏老荘の書籍とあつかひ詩哥
連哥の理とおしおて国よりさむるにあれば家々あそぶ
子あるらこときに俳諧は天下の一助（口傳）とすふへ一志なれし
俳諧の人を宮所（ミヤコ）の其のむれきはふれ田舎の秋の墨

よせりて工家商店のまつりことよりしかうさて酒肆
娼房のあそびよくらうに世界は義路の文あれども
向上の一路をあやうまぬとたちひく人を損せるもけるを
ちらんらへと益せるもけるてちらんら言ことへは互に義に
そこまく人を論（ヨシュ）ろとて俳諧そそねの字のしるを
そうけ諧を我家の貴送金あつかしおよそその人也ず
過さてへきとや今そさけ意を得さうにあさきはいな道
ねはくよ所よあそひやすきてかんに志て世の人をまし
へきをせく此俳借のきあれはそとを麗宴の媒して
世情の人和とそいゑる也評やけるの液沮ちるらうる

其比ニも人間の實よりしゆる志あれハ其比ニも大ニわけて
麁實の二重とあり一ツハ人ハ或ハ天倫の實とかくかて
恩愛の間よりしとあるハ或ハ天倫の二重よりおこりて
慳貪の氏ハ家とかゝるにて畢竟ハたのしよりはかる
との作りいうして皆さく麁實の二句同ある也とや
いさや我家の俳諧のそへにし例ハ二句同のふるへし分れハ
言語の作意とふるれむとて松風蘿月の称を
作らうてみれとの向上の附合しおもしろし△今や
投子一碗の茶に俳諧をそへしてまさあるそとしミ千丸
年の詠とありても家に写せ作わかきる　ミ花

晉山章在ニテ投子ノ會下ニ為ル茶頭ト投子一
日與ニテ茶ヲ乃チ曰ク森羅万象總ニ在リ這裡許ニ
茶頭潑却シテ茶ヲ曰ク森羅万象在ル什麼ノ処ニ
投子曰ク可シ惜ム一椀ノ茶

是ハよ投子の茶を點じて茶碗の中に世界あり
ても深かりしく持さはしく其神も新しき發句
あるに茶頭とかいやまさか味作にあれ没滋味の処ハ味
とさそて茶をおあけていつこよりあるとも例よ
作為の言極あるとおよひ二句同の作に至るもる
世よいよ作不おてのいゝ作らいして案ち此作の抓合

潑却 ウチアケル

なんぞかれ投子もまたと失はずしてあらゆる道に至
於るところに論にあたる句のたらぬをもおぎなひ開
き。器中の刀をぬくところ一字一字法の耳にちかき
況や此地に俳諧とありて由緒の言語にあらぬ
ことや、天つ人よ俳諧ありてとしかくて其枝のはらひ
ありて理屈に理屈とかさねあい国をもおさむべし
勇とても志ひてむ言をけるの一大事にして△聊道の
口伝といふもみちや此道の世におこなはれ處處
の面の子に節をはらいて諸臣孝子の喩によらむとし
十年の花此に皮肉とはげし十年の法地に耳目

とあそばしけれ△致知格物の條目にかなひなんはしかして
天下の一助ともなりなむ君もいる論の決する所
なほ一字の信をもとめして法によるねのそぞろごとをする
お眼におそれく学ふべくは皆にあつかふべからむ
べきもそれにて此俳諧の一大事なるらん

第三 俳諧徳

抑も俳諧の徳といふはもと理と理屈とを二にわかち△人理
とおいて天理にもとづかぬといふも法て俳諧の徳なるや△文
にやはらぎ武にいさむ流ありて仁勇の二つにして智を

渕深治筆

其性をあはふ故に志ありても仁勇のかけあるを志といへりされど
其智にも二ありて世智と仁勇とを和するかさり真智には
仁勇をゆはれてむかしたとへは張良か女児の態あるに志ある由
そを我家の白馬種にも俳諧の仁と謙笑の諷諫と
いひ俳諧の勇と文章の頓挫といふ智ともいふ俳諧の
機変に熟するのみならん志あるは俳諧の風雅にむかより
詩も歌も連歌もおなし詩も連歌も歌ともなれは氷の水より
もきよくおしく紫の朱をうはふものとしてはかりて家く
のこと地にして変と建立の二何にも我道の風骨ともいへる
ものあらは俳諧の一流と立なりて詩も連歌のみならし

と云れたらんはされと此性の賢愚とあるへし志うして此性
とひねむる故に万理と理命とのはらひとして其それを
はらくに文章なれは文章の中にも言語にはかりてはねよ
言語の書と云れとやはれは万理も理命とも万理は
全く善にして理命にて全く悪なりとこそいへるも
ある理にも善と悪ありて理命にひとへに悪なる物也
なりして善悪に善悪の三あらんとやされは十分の万理
あれとも君父をあしきはよあしてくれむに君父に孝しむ
さるも万理なれは理命にまくるもその理なるらんなれに
とされは万理とやけもて君をつきそむかり父をうらむるに

なるとや世にいふ連哥も変格にして俳諧は虚頭なり
とこそ人も倒の変化をまもれは口よりふみをわるへるも人は
あるふみを似へるしきまよへは佛家のこゝろにとらへて教家
と禅家と此ことはのこゝし 此俳諧も連哥とわたくむ
てまてるおやまるを或称にいひ変を語らうとて 和哥
いふも実をとへさもとさを一しらさ自己より実のこゝろをを捉
へを世にあれはいはれをそるゝふみのすて夫より思えし せよ世々思ふてか
すてこの語も男女の中をやはらけ其中も?ゝれをも
ふくさるゝも?そなるをや一る実の??く理を知りとせむ
へを・虚よりなくゆるほよしらはくもしし?もし?

虚實
眞 Wahrheit
美 Schönheit

和哥の鑑なるへしとて古今ノ万葉のむかし実をとそしもてなへる
古人こそしの思ひよ天智の御製より地統の御詠も
実はかりなの世とかはりて詠哥の趣をもふらし形容をもや
実に一首のゑともうへて山に晒とおそてへてや詩哥は才虚
とやとして六義に虚実の別あるを支考一開一あて
五?為も俳諧とてすそておのてのあし上より近頃と広く
てかなりとなて例に俳諧の端的ともうして一虚実不自在
の人かたる知るてやしき芭蕉翁門下の一振(つり)刀なりにふるてこそ
虚実をそてすかすられてもあれは虚実の虚実(口訣とすす)ほす
と俳諧のみとて此一大事とまうへし一向不言ぬ世風雅の

人し虚言とさへいへは真言とかはりて世道の益あらんことを
あれとしてよしとすると虚とおなしく実とおもしろく
も虚も世すして化にかはりて実となるのあらし
たとへるも徒らきらんは論すれは虚より万物とあらはれて
実より又倫とおなしくなりむかしより実を荘周か喩まり
それとて不也虚ちられは帰婦姑のあらそひとやかしきをか
実に虚実の善悪を論して実を好悪の二つにかたよらせ
虚かえりてはやくの真あるへし手前にゆへ倫の父と好む
いかにも実か忠孝のさまに似されしものかの云の耳に
ちかひなきの者有りのんによありさまとなるといふことをわきまへ

実より善悪よ
へらむとするの
忍寄美の地
をはなるゝ所

人を祀国にゆふて君の恩にたむくさ銭ふてあらておふの
名とくろく世にいてそろ実とよくねんとのそしおもかふと
全くおもちろひのそしらぬそらはしく有ならぬ悦の近き
いくらし実のように遠にけ二に道さん此て虚とに不
うらそ虚実ありて明と真つさらるを遊人の敬言ありんやに
かまにゆゆらて佞人の讒言あり山志ありて文人三義秋の名
とてらい武しるに略の法をうるいつれも机に同じてそ記
てよ里のおかの五面あるう文雅まても同くんぬ思神とて
るるてかせ武略まて種さまのゐてゐかしむこと虚
一喜怒の二度あるへしや況や要樗典にかみをしるのに

古、情、耳、今、姿 — 目 Gefühl, 目 Form.

第五姿情論

なにし俳諧の風姿風情とハこと葉に古今の差あれハや
古風ハ耳にきく情とせすて言語の上の姿とそしてそこ出まて
今様ハ目にて姿をみえく言語の外の情と念しられ
あハ情のこゝろして今ハ姿の論となる一概に情ある
姿あるらんや姿ハ情の道にあり姿あれハとて一概ニ情あると
あらそふへき論ハ同しくの姿とあるへからん言語の姿の外
ならぬことにありして其上の風情と称すとはまかりそむ世ニハ風
木男木女をもて姿情の論の論ありて及ハさらん今ハ風雅ニ語

甲冑衣食 — Gestaltung u. Plastik
姿 — Natur
姿、情 — Namen

のみならす俳諧論の一大事なるをもて姿情の弁
を論する人ハ天地の姿よりもとをもて其情
地といふよりこそ姿の姿をもておよ天地ハ人の作意を
うちえらあれハ人と姿のはしまりして月星を作して
天の姿といひ草木を作して地の姿とそなる古文の
秘訣に変なるん志て八姿の其外ハ情をねうちと
味もて一しそらへ君臣父子とその情を天地の間
にありて姿の忠と孝とにあるつるやそれは
其姿の凡まつとなくあれとしかるをくちれとも今は
姿の論とハ分や衣食住の具なり甲冑を帯され

いかなる法をもかかりの衣食を供すれは孝情あらはるゝ世の人
ありて情なきあらし論せは其文のよし姿をとゝのへ
ずに露て乗せ名存の情をたてゝ或は姿の人あり
て論するに及ばず此外に佛の経にも五逆の罪を
地獄とみなして殿の内に錢羅刀を持たる十王の
姿を極楽とみなして西の方に金蓮華を開かせる
佛と儒佛のあるを思ふに其元の法たちもあるは地獄
極楽の姿あるとは近訴なるに近訴とて近訴と
疑ふるをれと祥誌する繫辟擬とあり
紅頭に二万陵あれは傳書にも二百なきにや言文字

連俳の
情姿

の姿をとくいふ也此外中古の俳諧を双ふに今世の
歳旦と云月なし詞とむすひふ表月の言なる
情なく厳と情のする夫れさへ姿のまゝにて風あるを風姿
いふなる事をえるあらん律や今の俳諧とてふる古代の
詩の姿をも借らずして情を全くなくし似かよふ詩
を風情と云その中に含する風雅の餘情をもていふも
のなる俳諧の心あらんや世への詩にも其姿あるとまでね
いふ中古の名序子とやいふ心氣に連俳の姿情を論じ
月むとおもひけむ古今一情なくて詩の其しかるへく連俳
もあし姿なき詩も連俳として心はしさえる俳諧てふ

●よ差あり傾くにたけても一方にかたよりそれをまもりてこそ一芸
連俳をおもふ人をゆけるも芸に一能と事備くれ
滑稽かりて俳言連語の論ハそれに及ばん●世にいふ
連歌の姿をかりて俳諧の滑稽といふもしかして俳言をいふ
るすと論もしかれや風情によし△されそとられれて風流
へさうらに△新しきを求めや●新古ハ時の附合によりて替の
変化にあるへきとも求めれと其情の理滑稽にまことをひく
●連歌は志して俳諧よりて滑稽にありて情を励しと
いふも人を悔る端的の事なりん変に俳諧の附合を論
をいはねにお句の滑稽をとりてお句の情をゆするに及ぼ

けなに吾為に耳をとりて俳諧をすつるハ同じとなる俳諧
をいふ事とこゝろ●耳目に滑稽の情のたゝひよりて詠は
いぬ情の作ひあれハ色作れと言語の滑稽にしてならぬに
今はあるへきとあらそふしてゝ附して両袖をまくりて着
とちるあら暑しとてふ附ハ行肌をぬきて膝をまくる
それを下品の滑稽とこゝろえてあらしと云てる助語の一重も
志るれハ一字一點より附合の滑稽にかかりゆけくり亦はおのづから
俳諧といふも古いとしてふるあるへき事や けなに●温故知新
の弟子より今の俳諧の師たらんとまなふへし 史記の儒林
にも云ふへからと賛して或は●敏捷の二重にして学ぶ

第六俳諧地

「そも〳〵俳諧の地とらふる侍るは〳〵ようよう幸地といひ陸地
ことに下地といひまして合様の風地と地として素地
節として風ありあれば其中の要あれなるへし儒仏
の大道にも勧善懲悪を地形として仁義礼智に
王法の儀式とならべ殺盗婬妄に地獄の沙汰を
たすけなに仏の説法も世界の耳とおとろかし
七宝の荘厳を三七日まして何の曲もなく節も
なき阿含を十二年の骨折ありけるに擬読弾隨

の口教の次第を蔵に一にしてつくりて論語として不和の
法家の文章にさて人をあつかは論法のおき
やうに助語をんとわぬくなきれけるは各人の為と
実て虚実の節にして不和を又七章まで過ぎたらん
ほうとたる節のなるんも殊に家の風言をいれて結構を
あさめしして例の巧みも俳諧也節をなくの骨
うしつるを建立の大事ならて只一〳〵今やはしとひ
いふとついいつれさこ地と成勤して其のあるなくにて
あるんよしてや俳諧の地として下なり俗談平話
をあつめて雑談の体をひとまとめる例に虚実のあつかひ

"Die Wissenschaft muss umkehren!"

喜味もいひけり

詩と学と
国使もそ
詩の学様
いらぬ理い
たなりむ

と信ずべし漢に花嚴阿含の二ちぬよそ地とこそ覚え
とありして四子に蔵経の次才といひふう論語へ
おそくよ助辞とあわせていられもその處言らかくから
さる例の儒仰よあみくるに例の文章にうまやうあり
もとやまつると論語の隠便するよれにちぢよ一節の
ちりもと隠ふる謙そ我門の一脈よして容易
よ看過まてへち膚にて豆とかそふろれをあらむ
御辭ろにも一節やとあつらへ驪龍頷下のひるを
信くこて信れるそ人間の地よ偏川へてとや叢を
君文と男女と此一家をそれ友の三字よとめて昆弟

朋友の六備と言そるえと雖文質のみにつとつ也

才七修行地

抑も俳諧の修行といふことをあつき心得ると[illegible]
より儒佛の学者も修行の先へいりもしとうべて
こてを清しかくことあれとくらかり諦を飾しられて
あった屋労の現人とあらりあらそちよちとうれ此
媚人とありまして俳諧の屋漏ある曠懐によ弱きを
それとありてこちのきはりくいはをよの名をとられあつるさて
其くせかくれの他をつきへのよ[illegible]のかつてかくあれん陸や

例に依りのゆゑをうしなふより親にたてびくる下々にて
息子をあしなさし下まといふも孫に世々の憎愛を
ありなからこれも俳諧の權家と争ふは例の我理を
理不尽とれやまとひくべきからも下々より下よありしとふ
争しいさとよ我門の俳諧師を学びて十年の功と
ほこるはまる地に俳諧の眼をひらいて媚る人性の病
ありさや俳諧を学ぶものの詞にありておのづ文備の人と
なりてかゆる七情の我をやはらげて俳よ今日の世法
をうけとして孫の松比風も涼しく十年の人とあし
扇れにありよ骨折りくん悪するそのをなる里の名人と称し

田家の風景も花さるの風情も麦弁田植の吉日所
歩きも相島の時やらずて檐の出雲のおくし方も秋を
夕日の隠しハてて古の老實の姿しかしも京の
遊女も綴子にありくらして痴おさらるも人みなくけに
田舎の治郎もまつ逢生てあるひとに癡ゆる成も地あられ
ある武士の気象も大工の香霜も世界よあると
るもの皆くそのうちにありくなりて何ぞれ俳諧の流れ
みる人さ寂を溺心和説ども詠銀耳嚅もおのが主
也翁人の滑稽を我家の俳諧よ傳へらるといふあるに
こゝろをあしくへ我病くもしくて當もりけらさてまよい

樂乎。世論者將誘世情之遊。廣哉。豈知
所謂俳諧之和發儒仏而詩哥之媒意乎。
爾有則俳諧之一道者不為學佛乎。學儒
乎。實老荘揚墨之虛乎。常知虛實之変而
將設今日之世法乎。尓者歌人モ不隔即猶
之宗乎。連哥モ不寧千鳥之友乎。姿者攝
文武之門而情者為同蒼鳥之道矣。假令
為虛於其實了乎。其不可為實於其虛與者。
遇名庵居士之遺言也。則其言也何不有
善乎。其以祖翁之今授道也。則是以先師
之為説法也。止。今也憶是場之時節則祖
翁之滅後之十年而殆可遂此論之功而
傳其道之德矣。夫此故再撰此十論而合
成和漢文操之別録者也。享保己亥之歳
林鐘朏日 郁子居蓮二雨中書